

保幼小連携・接続 ～あなたは何を始めますか 架け橋期の子どもたちに～

講師

大林 照明 佛教大学特任教授

京都市架け橋会議コーディネーター

1. はじめに

私自身は、幼稚園で勤務したことはありません。しかし、様々な経験をする中で幼稚園と小学校をつないでいくということが非常に大事だと思いながら、仕事をしてきました。今日の話は、今、取組が進んでいる架け橋プログラムというのは何かというところから始めていきたいと思っています。そして、グループ協議を取り入れたみんなで交流できる研修にしたいと思っています。

2. 保幼小連携・接続について

架け橋期の子どもたちは、幼児・児童という言葉の違いはありますが、同じような姿が多く見られます。子ども目線で行う連携と、組織で行う連携を進めていくために、何が障害になっているかという点が明らかにできると、次のステップが見えると思います。自分が何をやっていけるかということと、自分一人では難しいため組織としてやっていかないといけないことを考え、学校、または園・所に戻られたときに、話を伝えていただくことを、今日のゴールのイメージとします。

参加者アンケート

「下記6項目より今日の研修で関心を持っていること、知りたいことを選ぶ」（スマホにて）

- ①架け橋プログラムの内容
- ②幼保小連携・接続の仕方
- ③現在の年長クラスや小学校1年生の連携・接続取組
- ④架け橋期の幼児・児童理解

⑤幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿の活用

⑥他校・園の情報

本日の参加者が一番関心のある項目は、幼保小の連携・接続の仕方でした。その次は、年長クラスや1年生の連携・接続取組です。連携・接続の仕方に関しては、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿（以下、10の姿と言う）のイメージを共有しながら話したいと思っています。取組についての他校・園の情報は、グループの中で色々聞けると思います。架け橋期の幼児・児童の理解については後半、皆さんに意見をもらった中から、提案したいと思います。さらに、接続の仕方という点にも踏み込みたいと思っています。そして、架け橋プログラムの内容については、なぜ架け橋プログラムができたのかということを少し紐解いたら、わかりやすいと思いますので、このような感じで進めていきます。

<グループ協議>

自己紹介（様々な校種の4・5人グループ）

校種がそれぞれ違ったので、様々なコミュニケーションが取れたと思います。

幼保小という言い方と保幼小という言い方があります。例えばこどもみらい館やこれまでの京都市の教育では、保幼小という言い方が残っています。幼保小は、文科省が今出している言葉で、本日は幼保小を使います。

幼保小の接続の背景

<グループ協議>

1997年から2019年の女性(25歳～44歳)就業率と保育所等利用率(全体)と保育所等利用率(1・2歳児)を調べたグラフを見て

1997年から折れ線グラフは、3項目とも上昇の一途をたどっています。1・2歳児の保育所利用率は、当初は最も低い16%でしたが上昇し、2015年には、35%になり、当初から上にあった全体の保育所使用率とクロスして、更に上昇していています。これは、2015年の女性活躍推進法の制定等による社会の変化によるものです。これに伴い、保育所等利用率、特に1・2歳児の利用率がさらに上昇し続けています。

社会の変化と幼児教育

1・2歳児の保育所等利用率が、2010年から2019年に向けて急激に上昇しています。ここから、幼児は家庭で育てるのではなく、就学前施設で育てていくという方向に社会が大きくシフトし始めているということがわかります。幼児教育に携わる保育者は、このような社会の変化の中で、就学前施設で子どもたちを育てるという意識をもっていないといけません。預かって育てるだけでなく、さらに将来の教育のビジョンまで見据えていかなくてはいけないのです。5Gの時代になり、変化の激しい時代を生きる力を培うことが必要になってきます。子どもたちが5年後10年後、どういうベースをもって育っているといいか、今一度、問い直してみると、この架け橋プログラムの大事さが分かります。

就学前施設と小学校は、小学校への進学の際、子どもの姿を共有してきました。その時、特に気になる子どもの姿や配慮を中心に連携をしてきました。しかし、小1プロブレムと言われる、例えばなかなか座らないとか、落ち着かないとかいう問題が生まれました。その背景には、就学前施設との子どもの姿の連携が、十分にできてないという問題があると思います。

例えば、1年生の担任はいつ頃発表されるでしょうか。おそらく3月の終わりぐらいだと思います。

す。そこから、担任になった先生が、クラスに誰がいるのか、どんな子どもなのかを調べて、1学期のスタートを切れるかと言うと、あまりにも余裕がありません。もう少し手前で発表できれば、その間に、幼稚園や保育園のアプローチカリキュラムを見に行ったりして、子どもの姿を理解できる可能性があるかもしれません。こうして見てみると、時間がない中、十分な連携をするにあたって、幼児教育から小学校で一貫したものが必要ではないかということになります。その場合、どの就学前施設に通っても、同じ水準の教育の質、保育の環境の保障が求められます。ここが、幼保小の接続が今まで、取り組んできた中で、系統的にうまくいきづらい部分でもあったと思います。幼保小接続の視点からも、一貫した教育が必要であると思っていたときに、幼児教育に関する基準の統一が行われました。

<グループ協議>

5歳児担任と1年生担任になり、交流会の場で質問が出たと想定しどう応えるか。

①5歳児担任から1年生担任「Aちゃんはドッジボールが得意でみんなのリーダーやったのに、なんかずっと見てたら友達と遊んでいないんですわ。何でなんですかね」

②1年生担任から5歳児担任「きちんと座って勉強できる子と立ち歩いている子がいます、幼稚園、また保育園で練習してへんのですか？」

この2つについて話し合う。

(発表例)

①「2通りの答えがあります。1つは、大好きな本を見つけて、その本を読むことを楽しんでます。という答え方です。もう1つは、多くの人数と一緒に進学している保育園や幼稚園からの子どもと、少人数の所から来ている子どもがいて、この子どもが少人数の子どもだったとして、周りの子どもたちの大きな波にのまれてしまって、自分をまだまだ出せてない部分があるかなと思います。というような、意見を出しました。」等

②「どういう場面で立ち歩いていたか。幼稚園だったら、こういう環境やこういう状況だと落

ち着いて座って話を聞くことができていました、と伝えました。」等

人の話を聞いたり、受け答えしたりすると、見えてくるものがあります。年度初めに幼保小でこういう話がされていると、児童・幼児の理解が進むと同時に、連携がもう少し見えてくると思います。しかし、幼稚園が遊びを通して学ぶということはだいたい小学校の先生方にも浸透したと思います。そして、それが幼児教育と学校教育の違いでもあります。

幼児教育と学校教育の違い

幼児教育は、到達させるものではなく、方向づける目標です。遊びを通して行う緩やかなものなのに対し、小学校は、到達目標です。教科等の学習領域で達成させることが求められます。当然、方向目標で育ってきた子どもたちが、小学校1年生になっていきなり到達目標に対応できるようにはなりません。その違いを理解していないと、互いに不十分な点を言い合うような関係になってしまいます。小中一貫教育を進めていくときも、不十分な点を言い合うようなスタートがありました。しかし、今では小中一貫で目指す目標がブロックで1つになり、9カ年の目標となり、大きく状況が動きました。それと同じようなことで言えば、この幼保小も同じスタイルで次のステップへ上がるときに来ていると思います。

両者は遊びを通してと教科目標を通してという、大きな違いがあります。それならば1年生はどうしたらいいかというのがスタートカリキュラムで、就学前施設はどうするのかというのがアプローチカリキュラムです。それらは、今までもつくられてきたのですが、全就学前施設の保育や教育を幼児教育として国が位置づけたことから新たに動き始めました。2017年の改訂で文部科学省のつくった幼稚園教育要領、内閣府・文部科学省・厚生労働省のまとめた認定こども園指針や要領、厚生労働省のつくった保育所保育指針が、全て幼児教育として統一されたのです。これが架け橋プログラムが動き出した一番の法的根拠です。

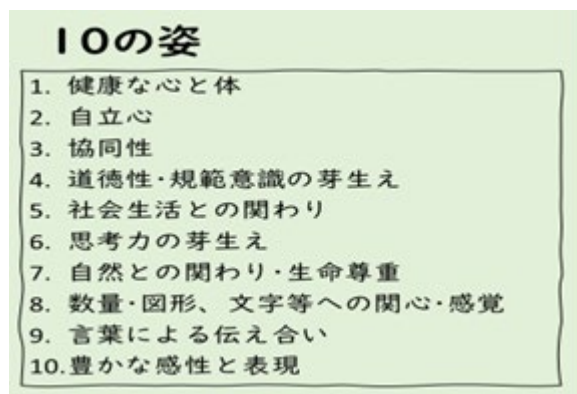
また、2017年の改訂で学習意義を再整理する上で、資質能力の3つの柱として「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を定めました。国が定めた幼児教育の資質能力は、「あそびや生活の中で豊かな体験を通じて、感じたり、気づいたり、分かったり、できるようになったりする知識及び技能の基礎」「気付いたことやできるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする思考力・判断力・表現力の基礎」「心情、意欲、態度が育つ中でよりよい生活を営もうとする学びに向かう力・人間性等」の3つの柱になっています。そして、小学校以降は、「実際の社会や生活で生きて働く知識及び技能」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力」「学んだことを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等」の3つの柱になっています。両者が3つの柱で接続できるようになり、全文を読むことによって、それぞれの学びの具体的なイメージが浮かぶと思います。これを、自校園所に戻られたら、もう一度皆さんで共有してください。これが基本的に国の方向性として定められたものであり、今までやってきたスタートカリキュラム、アプローチカリキュラムをこれに沿って、統一したものにしていけば、これから先の教育に大きく役立つということになります。そして、結果的に就学前施設の要領・指針が、小学校の学習指導要領に繋がることになると思います。これが架け橋プログラムが動いている根底にある、国の教育施策です。

3つの柱でつながることがわかるともっとつながりが見える話題や基準、見方がほしくなります。それが10の姿です。

10の姿とは

10の姿は、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿ではありますが、10の姿を元に子どもの成長を汲み取ることで、小学校へ子どもの様子をわかりやすく伝えられたり、今後の学校生活へスムーズに移行したりすることにもつながるのです。小学校と10の姿を共有することで、両者に共通の

認識が生まれます。



<グループ協議>

『おてて絵本』を使って、10の姿から選んだ項目をイメージした話を作り、紹介する。グループの仲間が、その話は10の姿の何に当たるかということを考える。

(『おてて絵本』とは…サトシンという絵本作家が、普及させているもの。親子で手を絵本に見立て、即興で話をつくる。)

(意見例)

①「アリサちゃんは、動物があまり好きではありません。お掃除もあまり好きではない女の子でした。でも、今日はお当番の日。ウサギ小屋のお掃除をしなくてはなりません。アリサちゃんは迷ったのですが、友達に『私はウサギとお掃除が好きじゃないからしたくない』と言いました。でも友達は、『アリサちゃんも一緒にしよう』と言ったので、とても困ってしまいました。なんだかウサギのララちゃんもこちらを見ている気がします。とても迷ったのですが、今日は頑張ってお掃除をすることにしました。お掃除が終わると、ララちゃんのご飯をモリモリ食べて元気に走っていたので、ちょっとやって良かったなと思いました。」

<10の姿は？>

「みんなで決めた当番を自分もしようという思いがあるところで、自立心を思いました。そして、友達と力を合わせて当番をする協同性、ウサギの世話をすることによって生命尊重、あと言葉による伝え合いも読み取れる思いました。」

②「今日から夏休み。タカヒロくんはお家のお手伝いをしようと決めました。今日は、洗濯物を畳

もうと決めました。なかなか畳みづらくて、いつもお母さんはこんなことをしてくれているんだと、感謝の気持ちでいっぱいになりました。お手伝いをしていると、何やら外が賑やかになっています。見てみると、今日は、近所で地藏盆のお祭りをやっている日でした。地藏盆に行ってみると、近所のゲンタロウおじいちゃんも、ヨーヨー釣りのお手伝いをしています。タカヒロくんは、地藏盆を楽しんだ後、ゲンタロウおじいちゃんみたいにヨーヨー釣りのお手伝いをしてみたいと思って、ヨーヨー釣りのお手伝いもすることにしました。お母さんのお手伝いだけでなく、町のお手伝いもできて、大満足のタカヒロくんでした。」

<10の姿は？>

②「社会生活との関わりを軸にして話をつくっていきましたが、後でグループで振り返り、自立心や、協同性も入っていると思いました。」

小学校の先生方も、就学前施設の生活の中で、遊びを通して、知識や道徳性の芽生えが、毎日たくさん起こっているということに気づいたと思います。そして、10の姿は1対1対応ではないということ、主となるものに重点をかけるけれども、違うところも関係して伸びるということがわかったと思います。そしてそれは、小学校も同じだと思います。

3 幼保小の架け橋プログラムとは

2022年に文科省が調査研究として始めたものが幼保小の架け橋プログラムです。京都市はこの調査研究の対象地域になりました。

架け橋期というのは、年長組5歳児と小学校1年生のことを言います。架け橋プログラムは、学習指導要領の3つの柱が、幼児教育から学校教育へつながっている、それを10の姿でもう一回見て、資質能力ベースで、育てていこうというものです。そうすると、5Gの時代が来ても、教育のつながりは幼児から小学校、小学校から中学校、そして、高等学校や専門学校等へと、子どもたちが成長していく中で、一貫して育てられるということになります。そこで、架け橋プログラムが大きく着目されているのです。

架け橋期のカリキュラムをつくっていくにあたり、架け橋期の年齢で、今までそれぞれが単独でつくっていたアプローチカリキュラムとスタートカリキュラムを、一体的につくっていくということが、1つのねらいです。そして、そのためには、幼保小の連携が今以上に必要になるということ、それから、資質能力ベースで育成してということを外さないように10の姿を通して見ていこうということ、これら全体を含めて、架け橋プログラムと言います。

また、この架け橋プログラムの中には、京都市で先頭切っている学校群の調査研究や、今年から配備されたコーディネーターを基に、どんな風に小学校が連携していったらいいかというような幼保小の連携に関する研究の組織的なことも入っています。

架け橋期のカリキュラム作成イメージ

架け橋カリキュラムというのは、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムを一体的に考え、幼保小の先生が共同してカリキュラムを考えていこうというものです。まず初めは、全部を網羅しようとするより、行事を通して考えるのが、私は一番わかりやすいと思います。まず、10の姿を手掛かりにして、行事を接続の視点で考えていく。例えば、就学前施設の先生が、交流体験で進学への安心感や期待感をもてるように、小学生とのかかわりが楽しめる時間や場を設けたいと思ったとき、小学校の1年生担任の先生たちが一緒になって交流体験の中身を考える。また、幼稚園・保育園には送る会があります。この機会に自信をもたせて送り出したいと考えたとき、昨年の卒園児や1年生の子どもたちから、小学校に行く5歳児が自信をもてるようなビデオをつくってもらえないかと、お願いしてみてもうかがいます。

小学校での迎える会では、就学前施設の先生方に、「時間があったら見に来てください」と案内をしていると思いますが、この迎える会の企画を予め共有しておく、次の年長組、またその次の年長組の子どもたちにも継続していくことがで

きるような交流になるのではないのでしょうか。例えば、入学の様子等を、「写真で撮っておくので紹介をお願いします」というような交流を企画したら、その写真や入学式で入ってきた子どもたちの様子をまた、次の年長組に継続してつなげていくことができると思います。子どもの姿の情報共有も大事ですが、行事は絶対にしているので、一緒に中身を考えるというのが、子どもをどう育てていこうという方向の連携をしていく上で、いいのではないかと思います。これをスタートカリキュラム、アプローチカリキュラムを一体化した架け橋期のカリキュラムとしてつくっていけたらいいのではないかとというのが、私の提案です。

下京雅小学校は、新しくできた学校ですが、それまで醒泉小学校として楊梅幼稚園と同じ敷地内にあった学校が新しくなったものです。下京雅小学校では、楊梅幼稚園と同じ共通の視点となるキーワードをもつカリキュラムがつくられました。共通の視点は、「連携」「すすんで学ぶ」「楽しく関わる」「自分でできる」の4つです。そして、例えば、4月から5月のカリキュラムでは、「すすんで学ぶ」という共通の視点で、身近な環境に興味をもって関わり、試したり考えたりする子どもたちの姿を見ていこうとしています。環境では、学習形態を工夫して共同的に学べるようにしていて、様々な園所から子どもたちが入学してくるので、グループ机や広いスペースを活用していくということを、学校全体で共通理解しています。そして、「自分でできる」という共通の視点において、教師は、4月5月は幼児期で身に付けた力を発揮できるようにしていこうという共通の約束事みたいなものを明記しています。すると、6年生担任・5年生担任も、こういう視点で4月5月の1年生を見ていきますし、学校全学年でも4月5月は身に付けた力を発揮できるようにするという視点で見えていける、という風が変わっていくでしょう。そして、戸惑いが必ず出るトイレの使用等については、個別の支援をして気を付けていこうということが、書いてあります。

楊梅幼稚園は、同じ敷地内にあります。楊梅幼稚園の年長児の1月から3月のカリキュラムには、「すすんで学ぶ」子どもの姿として、劇ごっこ遊びなどを今までの経験を生かして試行錯誤をしていこうとなっています。こんな風なカリキュラムが幼稚園側にあるから、教師は、こういう姿を5歳児で求めていくというかわりができます。カリキュラムをつくっていくときに、そんな風な見方のようなものを、まず行事からつくっていくとつくりやすいと思います。こういうイメージでこの架け橋期のカリキュラムを実際につくったらいいのではないかと、思います。

そして、幼保小接続のハードルとなっているのは、おそらく絶対的、物理的な距離だと思います。そして、交流することの目的と機会がないということではないでしょうか。更にもっとつつこむと、言い過ぎかもしれませんが、小学校からお誘いがないというような組織的な課題ではないでしょうか。計画的に「交流会を開きますので集まってください」と呼びかけた時、仕方がないことです。が、私立や市立の保育園所や幼稚園で、温度差ができるといった組織的、物理的な課題があると思います。その他の課題では、架け橋カリキュラムのつくり方の手法がわかりにくいという中身のことになると思います。

御所南小学校の1年生入学3日目の様子をビデオにて視聴

子どもたちは入学3日目で、就学前施設の様子に過ごしています。担任の先生が座って話をしている位置、これも就学前施設の先生と同じです。新しい環境に様々な園所出身の子どもたちが、集まっています。子どもが椅子に座らず先生の後ろにくっついてきても、先生は特に注意することなく接しています。このように、入学3日目の子どもの姿を受容できる先生であるかどうか、大きな要素だと思います。それが、3月末の担任発表で、就学前施設から来たばかりの子どもたちを理解し、受容的にかかわれるかということ、難しいでしょう。そこには制度的な課題もあると思います。

御所南小学校の1年生の姿をビデオにて視聴

様々な園所から入学してきた子どもたちが集まって、先生の読み聞かせを楽しんでいます。周りには、道具箱を片付けた後、色鉛筆でお絵かきをしている子がいます。たまたま本棚の前に数名集まって、絵本を楽しんでいた子どもたちの姿を先生がうまく見つけ、そこへ行って読み聞かせをしています。幼児教育の延長がうまくできていると思いました。小学校1年生のスタートがこんな風にできるといいと思います。

廿日市市立原保育園の子どもたちの姿をビデオにて視聴

子どもたちがチームでカルタ取りをしてカルタを数えるときに、必然的にチームに分かれて椅子に座っています。就学前施設では遊びの中で数的な興味をうまく引き出し、小学校へつないでいけるようにしています。その情報を1年生担任の先生が知り「みんなカルタ取りしたね。その時、カルタの枚数を数えてたよね」と声掛けができると、かわり方が変わってくると思います。

4 何を始めるか

「チーム架け橋」をつくりましょう。簡単に言うと、1年生の先生が校区の就学前施設の5歳児の先生の名前と、1年生の先生の名前を入れ、そしてコーディネーターがいたらコーディネーターの名前も入れて、この人たちで「チーム架け橋」ですと、チームをつくりましょう。とりあえず「チーム架け橋」できた！みたいなところからスタートするのが、今できることだと思います。ぜひ所属長の方に話してみてください。まず、「チーム架け橋」でこれだけの先生がいるということを明記します。

次は、「架け橋コーナー」です。「チーム架け橋」ができたなら、学校のどこか、園のどこかに「架け橋コーナー」をつくり、例えば、小学校の給食とか、幼稚園で見学に行った祇園祭等、できたら園と小学校と両方のかかわりがあるものを展示し

ます。小学校は、全ての子どもたちの出身園とかかわりがあるものがあるといいと思います。就学前施設は、学校生活がわかるもの等がいいと思います。例えば、クイズ的なもの、言葉遊び的なものが入っていると、その話題で楽しむことができいいでしょう。また、くつ箱とか、小学校の様子が見える写真のようなものでもいいです。こんな風な「架け橋コーナー」があれば、確実に見える化します。保護者や、卒園した1年生の子どもたちが見て、「あー、あれや！」みたいな話ができたら、これこそ見える化が進んでいきます。

そして、ぜひ校長先生のリーダーシップで実現してほしいのは、交流会の開催です。とにかく年1回、「チーム架け橋」と接続主任が企画し、難しい研修会もいいですが、一緒に歌あそび等をするような交流会をしていくといいと思います。互いの施設を訪ねて呼び鈴を押すときの気持ちが、相手の先生を知っているのと、知らないのとでは全然変わりますので、顔見知りになるような交流を1回は開催してほしいです。その計画は、これからされていくという風には聞いていますので、お願いします。

ここまでの、組織でやっていくことの代表的な例です。

次は、保育者や先生方の取組です。子どもたちに自分のお気に入りの場所をつくってほしいと思います。幼稚園ではきっとあると思います。小学校でも、階段の隅で本を読むことが好きな子どもがいるかもしれません。それは個人のお気に入りの場所ですが、学級のお気に入り場所ができたら、認知力が身に付きます。いつも座っているとそこから見える景色も、見る場所が変わると周りにある環境や、友達関係が変わります。すると、そこで、新たな気づきが認知力として身に付きます。その中で、友達と思いがぶつかったとき等に、自己コントロールをする力が少しずつ付いていきます。教室だけでは付けられなかった力が、違う場所へ行ったことがきっかけになって、また新たな発見や我慢する力につながります。結果的に1年生の終わりには、安心感と人間関係のある学

級ができると思います。

下京雅小学校の1年生、「楽器と仲良くなるう」9月頃の活動の姿の写真を見て

楽器の使い方を図示している写真を見て、就学前施設の先生は、何を到達目標にしているのか見えないと思います。教科で知識技能を習得することが主体的に学ぶ力につながっていきます。そこには、小学校ならではの工夫があります。楽器の扱いについてきちんと図で説明されています。タムブリンの穴に指を入れない等です。そういうことは、幼保小の先生方で交流ができると思います。そして、聞こえた音をオノマトペにする時、たたき方で音が変わったというところに着目させたいと思います。パンパンとかトントンという、耳で聞こえた音を言語化する活動は非常に大事です。これが、自らの経験とつなぐ言葉の1つとなり、再現性のある言葉となります。オノマトペは、音楽だけでなく、国語でも使われます。

御所南小学校の体育のマットあそびの写真を見て

マットあそびの環境の中に、草むらを模したものが置いてあります。すると体をひねったり横に向いたり回ったり等の活動するとき、虫を模倣するような動きが出てきます。また、草を跳んで越えられるかといった場も設定されています。どんな環境をつくると子どもたちが思わず体を動かしたくなるのかということを、幼保小連携の1つとして、まず共に考えてみるのもいいでしょう。

竹田小学校の子どもが前に出て発表し、他児が拍手をする5月のビデオを視聴

今までなかなかみんなの前で発言しなかった子どもが発言をした場面です。そのときに、クラスみんなが拍手をしています。こういう姿勢が素晴らしいと思います。しっかりと先生を信頼して拍手をしたり、「はい！」と手を挙げたりしています。もちろん、1日の中では落ち着かない姿がある時間もあります。けれど、こんな場面があ

るということをみんなで喜び合えたら、大きな成果です。

小学校に行くと、算数科の勉強があります。「たろうさんはアメを8個持っています。3個、友達にあげました。さあ何個残ってるでしょう」という、抽象的な問題が出てきます。そのときに、頭の中では自分の経験を、疑似的な経験として再現しています。就学前施設で様々な経験を積んでおくことが、小学校で疑似的な経験を再現する上で非常に役に立つと思います。小学校においては、例えば先生が袋を持って「今からアメ出すよ」「ひとつ、ふた一つ、みつつ」と演出をしながらアメ出していきます。「さあ、このアメさん3個、どうなったでしょう？」という風に問題を投げかけると、子どもたちから「食べた!」とか、「犬が持って行った!」とか、様々な意見が出てきます。こういう経験をしながら、「アメを3つ友達にあげました」とイメージをさせると、知識と経験が、うまくつながります。これも最後に伝えたいと思いました。

皆さんの力で、ぜひやれることを始めていっていただきたいと思います。

令和5年度第5回共同機構研修会 令和5年7月28日 於：京都市総合教育センター
